

博物館に寄せられる質問の 自然史情報としての意義

滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員 金尾 滋史

1. はじめに

2024年7月、琵琶湖博物館に1件の質問の電話が寄せられた。その内容は「滋賀県東部の河川で釣りをしている際にオオサンショウオを見た。これまで長年この川で釣りをしてきたが、見るのは初めてである。この川にはもともとオオサンショウオがいるのか？」という質問であった。この電話がきっかけとなり、演者は情報の集約をはじめ、自身でも河川において個体を確認した。そして、県内の関係団体や大学、行政機関と連携して、関係法令に従ってこの個体を捕獲し、DNA分析を実施したところ、オオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオとの交雑個体であることがわかった。併せて、この河川における目撃情報がこれまでなかったことから、近年になって人為的に放流された可能性が示唆され、報道を通じて警鐘を鳴らした。

このように、博物館への質問がきっかけとなり、これまで未発見や記録が乏しかった生物の分布情報、外来生物の発見記録例など県内の自然史に関する有益な情報をもたらされることがある。本報告では、当館に寄せられた質問が起点となり、新たな自然史情報となった事例を紹介し、博物館における質問とその回答（レファレンス機能）のもつ、新しい可能性について考察した。

2. 琵琶湖博物館に寄せられる質問の経路

琵琶湖博物館では、様々な形で質問を受け付けているが、利用者が博物館へ質問する経路は、①館内の質問コーナー、②代表質問メール、③代表番号への電話（FAX含む）、④学芸員への直接連絡（メール、電話）、⑤展示室における展示交流員への質問、⑥手紙（郵便物）と大きく6つに分類される。この中で特に利用が多いのは、①、②、③である。質問コーナーは、博物館展示室「おとなのディスカバリー」内にあり、学芸員が毎日交



図1. 琵琶湖博物館の質問コーナー

代で担当し、来館者からの質問に答えている（図1）。これは学芸員数が多い博物館だからこそ可能なシステムではあるが、多くの博物館では受付などもこれに近い機能を果たしていると考えられる。代表質問メールは、博物館ホームページにメールアドレスが掲載されており、利用者はそのアドレスにメールを送ることで質問をすることができる。博物館に届いたメールは質問メール担当者が確認し、質問内容に合わせてそれぞれ専門の学芸員に転送し、学芸員から質問者へ回答メールを送っている。代表番号への電話による質問も少なくなく、内容に応じて電話応対者が質問コーナー担当者やそれぞれ専門の学芸員へ電話を回し、回答している。また一度メールや電話で回答を行った場合、その後は学芸員へ直接質問の連絡が入ることも多い。①質問コーナー、②代表質問メールに関しては、年間での集計が可能であり、ここ数年は合計すると年間1000件を超えている（図2）。

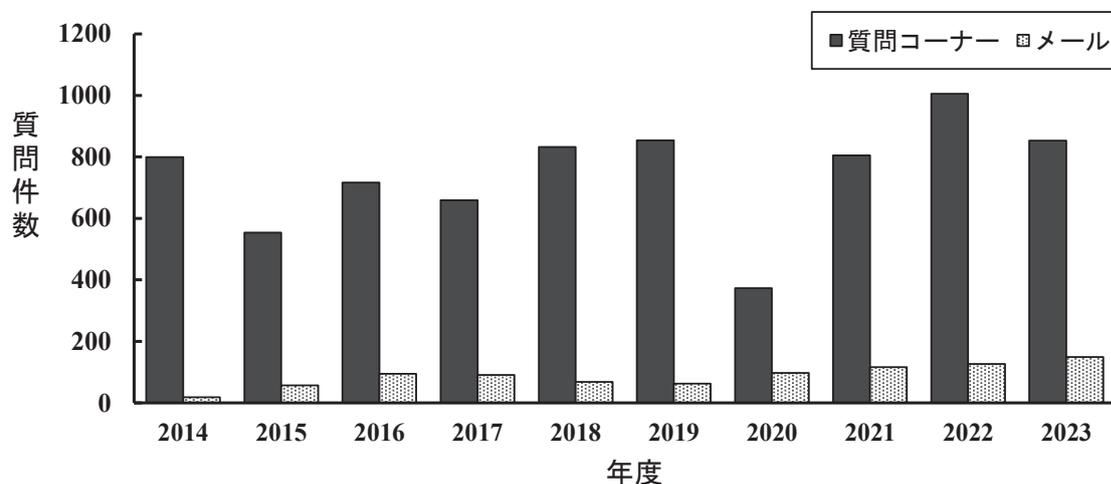


図2. 琵琶湖博物館の質問コーナーおよび質問メールの件数の推移
 （質問コーナーには一部電話も含む。また2020年度、2021年度は新型コロナウイルス感染症による影響のため、質問コーナーが閉鎖されていた時期を含む）

3. 新たな自然史情報となった質問の事例

このように、琵琶湖博物館には年間を通じて多くの質問が寄せられており、特にその中でも質問が多いのは生物分野である。この生物分野に関する質問に焦点を当てると、A.生き物の名前を教えてほしい（種の同定）、B.生き物の知識・情報を知りたい、C.生き物の飼育方法（病気への対処含む）を教えてほしいという内容が多い。特にCに関しては、当館が水族展示を有しており、多くの水生生物を飼育していること、また県内には大規模な水族館が他にないことなど、地理的な条件も含まれていると考えられる。

そのような中で、特にAやBに関する質問の中には、時折学芸員が目を引くような質問が含まれていることがある。以下に昆虫の分野での事例を紹介する。

1) 滋賀県内で約 30 年ぶりの記録となったコガタノゲンゴロウの再発見

2020 年 9 月、演者のもとに、県内在住の親子から連絡があった。その内容は「子どもが家の近くの水路でゲンゴロウのようなものを見つけたが、滋賀県ではゲンゴロウは絶滅していると聞いた。このゲンゴロウはどんな種類なのか？」というものであった。幸いにも写真が添付されており、その写真を見た瞬間、演者は鳥肌が立った。それは、滋賀県内では約 30 年発見されていなかったコガタノゲンゴロウという種であった(図 3)。本種は近年、九州や中国地方で生息数が増加している種であり、いつか滋賀県でも確認されるだろうと思っていた中での大発見であった。その後、現地を調査し、論文として報告したほか、この発見に関するトピック展示も実施した(金尾, 2021)。



図 3. 滋賀県で約 30 年ぶりに発見されたコガタノゲンゴロウ

2) 滋賀県内における外来種ムネアカハラビロカマキリの発見

2020 年 10 月に、県内在住の中学生から「ムネアカハラビロカマキリと思われるカマキリを採集したので見てほしい」というメールが届いた。このカマキリは、近年国内で発見例が増加している外来種であり、当時、滋賀県下では目撃情報があったものの、確実な記録となる標本がない状況であった。この中学生は、昆虫や爬虫類など生き物が好きなこともあり、普段見かけるカマキリとは違うということも認識しての質問であった。写真から、本種であることがわかったほか、採集した標本は琵琶湖博物館へ保管され、また演者と共同で報文を執筆した(金尾・吉本, 2021)。

3) 滋賀県内におけるハラグロオオテントウの発見

2010 年、当時小学生が県内で発見したテントウムシの種類を調べるために、当館を訪れ、質問をしたところ、滋賀県内ではまだ発見されたことがないハラグロオオテントウという大型のテントウムシであることがわかり、大きなニュースとなった(八尋, 2010)。その後、本種は滋賀県東部において若干の採集例が知られていたが、2021 年にも県内在住の親子から本種かもしれないテントウムシを発見したので見てほしいという質問が博物館に寄せられた。質問コーナーにおいて採集した個体を確認したところ、間違いなく本種であり、発見した地域はこれまでの県内の分布における空白地帯となる場所であり、重要な記録となった。

4. 博物館に届く質問の新たな価値の創出

このように紹介した事例は、質問 1 件で論文や報文につながった大きな生物の発見事例であり、実際に博物館で行っているレファレンスで頻繁に起こっている訳ではない。しかし、それ以外にも「県内で確認記録が少ない在来種の情報」および「県内で増えつつある外来生物の情報」などは質問を通じて常時蓄積されており、これらが増えていくことで重要な知見へと発展していくこともある。このように、博物館へ寄せられる質問の一部は専門家を介して科学的知見に貢献する機能をもっていると考えられる。すなわち、博物館におけるレファレンス機能は単に利用者の質問に答えるだけでなく、その地域において研究者が見つかることのできなかつた情報も収集することが可能と考えられる。

博物館は多くの市民が集い、学べる場として、これまでも市民参加型の調査研究を積極的に行い、いわゆる市民科学の基礎を築いてきたといえる。そのような中で、本報告が示した博物館におけるレファレンス機能は、市民科学の新たな可能性を切り拓くものとして期待される。博物館への質問者は、必ずしも市民科学の貢献を意図して質問をしている訳ではない。いわば同床異夢的な現象ではあるが、こうしたやりとりや提供された情報に科学的価値を見出し、評価する仕組みを博物館側が準備しておくことが、博物館の行う新たな市民科学の発展に繋がるだろう。日々の暮らしの中で得られる何気ない情報の科学的価値を広く認識してもらい、博物館的な意義を通じて市民科学を拡大していくことは、地域住民の科学リテラシー向上にも寄与するのではないだろうか。

謝辞

本研究の一部は令和 5～7 年度科学研究費助成事業（基盤研究 (C)）「自然史系博物館におけるレファレンス機能の分析と新たな価値の創出に関する研究（研究代表者：金尾滋史）」（JSPS KAKENHI Grant Number 23K00968）によって実施した。

引用文献

金尾滋史・吉本瀧侍（2020）滋賀県大津市南部で確認された外来種ムネアカハラビロカマキリ。滋賀むしの会会報 *Came 虫*, 203: 23-24.

金尾滋史（2021）滋賀県内におけるコガタノゲンゴロウの再発見と博物館の貢献。地域自然史と保全, 43(1): 63-66.

八尋克郎（2010）滋賀県初記録のハラグロオオテントウ。滋賀むしの会会報 *Came 虫*, 158: 10.